

日本留学 30 年の物語

恩師金美齢と再会、後輩たちを激励

◆「ここは日本の実家」

—里帰りしたくなる母校

「先生、こんにちは！」

3年にわたるコロナ禍が落ち着き、入国制限が緩和されてから JET 日本語学校にはほぼ毎日のように卒業生が訪れます。

ひとりで、家族と、友達を連れて。1988年創立ですから、卒業したばかりの者から30数年前の卒業生まで、年代も広い。JET 日本語学校の名物風景かもしれません。

金美齢名誉理事長が初代校長であった当時から、卒業する学生たちに「ここはあなたたちの日本の実家だから、うれしいことがあったら、そしてたいへんなことがあってもどうぞ JET を訪ねてきてください」と言って送り出していました。

また帰りたくなる母校であるなら、教職員にとってこれ以上うれしいことはありません。

最近、里帰りしたのは崔暁倩さん（1992年3月卒）。現在台湾の国立中正大学経済学系教授主任を務める崔さんは、研究活動で来日し、その合間に母校を訪ねてくれたのでした。

休み時間に廊下にいる後輩の台湾学生たちと一気に距離を縮め、激励しています。

実は崔さん、この来日にあたってどうしても会いたかったのは恩師金美齢先生でした。

◆学生結婚、子育て、研究。

「天は自ら助くる者を助く」

ときはさかのぼります。

日本語の全くできなかった崔さんが、婚約者、呉俊賢さん（JET 日本語学校 1992年卒）を追って JET に入学したのは30余年前。まもなく結婚を決めた頃、金美齢校長（当時）が「日本でも皆に報告したほうがいいよ。わたしの家を貸してあげるから料理を作って友達を呼んで」と助言し、金先生宅で30人以上の人を呼んで報告会をしたのでした。

その後、夫婦で筑波大学大学院の合格通知を受け取ったのと同時に子どもを授かったことがわかります。

研究か、子どもか。悩みに悩んで金先生に相談したところ、「両方ともやってみたら。だめだったら休学すればいい」とのお答え。

実は、留学生だった金先生自身も学生結婚で、早稲田大学大学院時代にお子さんを2人授かり、スーパーウーマンになる決心をして両立させた実体験から、若き台湾人夫婦を応援したのです。

JET の卒業式で二人は皆の前で両立宣言をし、もう前へ進むしかありませんでした。



金美齢先生宅で結婚報告会（1991年1月）。立っているのが呉俊賢さん。

筑波大学大学院時代は二人力合わせて子育てと研究の疾風怒涛の日々。

周英明・金美齢先生夫妻の推薦により、ロータリークラブの米山奨学生にも選ばれ、夫婦共々見事博士学位を取得することができました。2人の子どもたちも元気に成長しました。

金先生がいつも口にする「天は自ら助くる者を助く」(JET日本語学校の校訓)はくじけそうになった時の「薬」になっているそうです。



金美齢先生宅にて。後列左から呉俊賢さん、崔曉倩さん。前列中央の綴友とは今も交流がある。

◆台湾と日本の架け橋として

崔曉倩さんは高齢化社会の研究のため東京大学、東北大学と連携したり、地方創生の研究では日本各地を訪ねます。

今回の来日も約1か月にわたり、茨城県笠間市に滞在して市長と懇談しました。

一方、呉俊賢さんも現在、環球科技大学(台湾)で教鞭をとり、地場産業研究の著書も数冊書いています。また、明治大学や小山台教育財団との学術交流で毎年大学院生を連れて来日しています。

夫婦ともども台湾と日本の架け橋になっています。

◆恩師金美齢を訪ねる

—30年後の幸福な風景

光陰矢の如し。

JET卒業から30余年を経て2023年1月下旬、夫婦そろって金美齢名誉理事長を訪ねました。

当時50代の金先生は、御年89歳。20代の留学生夫婦は今や50代。

ずっと願っていた、ゆっくり直接お礼を申し上げる機会がついに実現したのです。

恩師とおいしいものを食べながら語らう特別な時間。

日本留学しなければ、そして何より金先生との出会いがなかったらどんな人生を送っていたのでしょうか。

崔さんは「(夫の)呉さんは日本語専攻だから、もちろん日本がよかった。わたしは元々アメリカへ行くつもりだったけど、日本に来てJETで一から勉強し、充実した学生生活ができてほんとうにありがたかった。JETでの出会いが人生を変えた」と語ります。

「とにかく目標をもってがんばることが大切。目標があれば、未来への戸惑いもきっと消えて、日本の留学生生活を満喫できますよ」かつて金先生が崔さんたちを励ましたように、若い後輩たちに呼びかけます。



恩師と30余年ぶりの会食。左から崔曉倩さん、金美齢先生、呉俊賢さん。

(得猪節子)